日本信用販売が1956年に販売した分譲マンション「四谷コーポラス」の設計プロセス

THE DESIGN PROCESS OF “YOTSUYA CO-OPERATIVE HOUSE,” THE CONDOMINIUM SOLD BY NIPPON SHINYO HANBAI IN 1956

植竹悠歩 — * 1 大月敏雄 — * 2
志岐祐一 — * 3 松本真澄 — * 4

Yuhō UETAKE — * 1 Toshio OTSUKI — * 2
Yuichi SHIKI — * 3 Masumi MATSUMOTO — * 4

キーワード：
鉄筋コンクリート造, 集合住宅, 分譲マンション, メゾネット,
設計プロセス

Keywords:
Reinforced concrete, Multiple dwelling house, Condominium,
Maisonette, Design process

In this study, we tried to clarify the design process of “Yotsuya Co-operative House” from documents, design drawings and measurement surveys. In January 1956, at the time of beginning to sell, the design had high independency with individual stairs on the first floor. In the design drawing in February, it seems that the design of common parts was completed. In July, layouts of each dwelling units were fixed. Changes of interior design were divided into four works: construction, electric, gas, and sanitation. From the measurement surveys in 2017, we clarified the detailed design of dwelling units and common facilities.

1. はじめに

我が国において分譲マンションは戦後に誕生し、民間企業が供給したものとしては日本信用販売が1956年に分譲販売した四谷コーポラスが第1号とされる¹⁾。民間分譲マンションの発生経緯について、建築学分野ではこれまで建築系雑誌、新聞広告、聞き取り調査等を用いた研究^{2)~5)}が行われてきたが、四谷コーポラスは雑誌、文献等への掲載が少なく、その設計の詳細は把握されてこなかった。

筆者らは2017年度から、四谷コーポラスを対象として、日本信用販売不動産部門の企画関係者及び入居者への聞き取り調査、解体前・解体時の実測調査及び資料収集を行ってきた。既報^{6)~8)}では、企画時にアメリカ大使館からコーポラティブ・ハウジングを教わっていたこと、購入者による室内設計の変更が可能な二段階的な設計手法が用いられたこと、設計を担当した佐藤工業の木村恵一は元建設省営繕局長であり、公務員宿舍の建設を経験していたことを指摘した。

本稿では、四谷コーポラスの設計内容を時系列的に整理することで、設計のプロセスと変遷を明らかにすることを目的とする。分析の対象とした資料を以下に示す。

- 居住者所蔵資料である四谷コーポラス分譲販売時の「四ツ谷・コーポラス分譲要綱」(以下、「分譲要綱」とする)及び「パンフレット」、室内設計変更時の見積書、日本信用販売の後身の信販コーポラス及び日本開発の関連資料^{注1)}
- 佐藤工業所蔵資料である「日本信販四ツ谷コーポラス新築工事設計図」(以下、「新築工事設計図」)
- 2017年8月~9月の解体前実測調査で作製した現況図
- 3大紙の新聞記事・広告^{注2)}

尚、掲載する図面の縮尺については、図面の実際の縮尺を(S=1/○)、本稿上での縮尺を[縮尺=1/○]と表記した。

2. 設計・建設の過程

まず、資料より四谷コーポラスの設計・建設の過程を整理した(図1)。1955年8月の『建築技術』⁹⁾によれば木村恵一は1955年8月には既に佐藤工業に入社していた。信販コーポラス資料^{注3)}によれば四谷コーポラスの分譲販売は1956年1月に開始され、1956年1月29日の『毎日新聞』^{注4)}には分譲販売の広告が掲載されていた。1956年3月4日の『毎日新聞』^{注5)}には、「模型を前に室内設計を相談する四谷コーポラスの入居者たち」と題した写真が掲載され、記事には「分譲募集を行ったところまたたく間に五倍の応募者が殺到した」と記載されていた。また、販売時の「分譲要綱」には「竣工予定期日」は「昭和31年8月末日」と記載されていた。

「新築工事設計図」では、ほとんどの構造図及び設備図の日付欄に「31年2月16日」との記載を確認し、同時期に建設工事が着工していたと推察される。各住戸の室内平面詳細図(メゾネット式24戸中13戸、フラット式4戸中4戸を確認)には「5.17 済」~「5.25 済」の記載があり、各住戸の間取りが異なる各階平面図の日付欄には「31年7月6日」との記載を確認したことから、7月には全ての住戸の設計変更が完了していたと推察される。

さらに、1972年の日本開発の「社内報」^{注6)}によれば、建設工事の遅れから1956年10月に竣工し、1956年10月14日の『朝日新聞』^{注7)}には竣工公開の広告が掲載されていたことを確認した。

図1 四谷コーポラスの設計・建設の過程

本稿は、参考文献6)、7)で発表した内容に追加分析・修正を加え、発展させたものである。

¹⁾ 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 修士課程
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1)

²⁾ 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 教授・博士(工学)

³⁾ 株式会社日東設計事務所

⁴⁾ 首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域 助教

¹⁾ Graduate Student, Dept. of Architecture, School of Eng., The Univ. of Tokyo

²⁾ Prof., Dept. of Architecture, School of Eng., The Univ. of Tokyo, Dr. Eng.

³⁾ Nitto Architects & Engineers Inc.

⁴⁾ Assistant Prof., Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ.

3. 分譲販売開始時（1956 年 1 月）の設計内容

ここでは、1956 年 1 月の分譲販売時に作成された資料である「分譲要綱」及び「パンフレット」の記載内容を分析した。

3.1 「分譲要綱」

「分譲要綱」には「住宅の規模」として A 型、B 型の間取りが記載され、どちらの型式にも「テラス」と「バルコニー」が含まれていた（表 1）。また、室内設計に関しては「外観をくずさず主要構造部分、主要配線、配管をかえなくて住宅の内部の模様替は当社の承認を経て自由に出来ます」、「夫々の居室はお好みにより和洋いずれの型にでも作り上げるようになっていきます」と記載されていた。さらに、メゾネット式である A 型は「日本に於て最初の試みである各戸二階型式で其の内部に夫々階段を有しております。尚この型式は特許申請中」とであると記載されていたことを確認した^{注8)}。

3.2 「パンフレット」

「パンフレット」には A 型平面図及び鳥瞰図^{注9)}（図 2）、西側外観透視図（図 3）、西側立面図（図 4）、配置図兼 1 階平面図（図 5）が掲載されていたことを確認した。

このうち、A 型の平面図及び鳥瞰図では、和式便所であった点、浴室が廊下に沿って細長い形状であった点、玄関扉が単独の片開き扉であった点が、後の「新築工事設計図」の設計内容と異なっていた。また、階段に蹴込み板は描かれていなかった。

西側外観透視図では、1 階には共用廊下はみられず、戸別の階段を

確認した。「分譲要綱」に記載された各住戸の「テラス」は、この戸別階段を持つ住戸における玄関前の空間を指していたと推察される。そのほか、バルコニー及び共用廊下の手摺りに目隠しはなく、戸境の壁が強調された外観として描かれていた。

西側立面図、配置図兼 1 階平面図でも 1 階の戸別の階段を確認した。また、建物北側には屋根付きの半屋外空間が描かれていた。

尚、西側外観透視図は 1956 年 1 月の『毎日新聞』^{注10)}に掲載された広告の透視図と同一であることを確認した。また、1956 年 3 月の『毎日新聞』^{注11)}に掲載された写真中の模型は 1 階の戸別階段を持っていたことを確認した。

4. 「新築工事設計図」（1956 年 2 月 16 日）の設計内容

次に、「新築工事設計図」のうち、日付欄に「31 年 2 月 16 日」と記載された図面の設計内容を分析した。

4.1 A 型平面詳細図

A 型平面詳細図（S=1/20）（図 6）には上メゾネット式住戸が記載され、図面左には下階段の部分図を確認した。よって、上下のメゾネット式住戸において共通の基本設計図として作成されたものであったとみられる。便宜上、図面に室名称等を加筆した。

サブルームには主な機能として玄関と台所が記載されていた。玄関扉には内開きの親子扉が、小扉横に収納が、台所の流し奥にはゴミ入れが、ガスレンジ上部には排気用フードが描かれていた。メインルームの 3 つの居室は畳敷きであり、それぞれ幅 1 尺半ほどの縁側と「障子引違ひ」を持っていた。居室の出入口は、居室（東 4.5 帖）のみ引違い戸であり、他の 2 つでは片開き戸であった。収納（東西）は互い違いの 3/4 帖ずつの押入れとなっていた。浴室の形状は変更され、洗面台が独立し、その隣には「瓦斯湯沸器」と「電気洗濯機」の置き場が設けられていた^{注12)}。便所には半円形の手洗いと洋式便座が描かれ、浴槽には「風呂桶 木製 丸角型」の記載があった。廊下

表 1 「分譲要綱」に記載された「住宅の規模」の内容

型式	戸数・面積	間取り
A 型	24 戸・1 戸約 25 坪 (共用部分を含む) 専有面積 23.3 坪	メイン・ルーム：6 帖・4 帖半・4 帖半・浴室・洗面所・ 便所・押入（1 間・1 間・半間）・バルコニー サブ・ルーム：玄関・居間兼食堂・台所・テラス
B 型	4 戸・1 戸約 17 坪 (共用部分を含む) 専有面積 15.6 坪	玄関・6 帖・6 帖・食堂及居間・浴室・洗面所・便所・ 押入（1 間・1 間・半間）・テラス・バルコニー

0 5m [縮尺=1/200]

図 2 「パンフレット」に掲載された A 型平面図 / 鳥瞰図

図 3 「パンフレット」に掲載された西側外観透視図

図 4 「パンフレット」に掲載された西側立面図

図 5 「パンフレット」に掲載された配置図兼 1 階平面図

の床材は「床フローリング」であり、洗面台及び便所では「人造石研出」、浴室では「床モザイクタイル」が記載されていた。

4.2 B型詳細図

B型に関しては平面・断面・西側立面の詳細図(S=1/20)を確認した。平面詳細図の記載内容はA型と大きな違いは見られなかった(図7)。西側立面図(図8)では実際と同様に、玄関周辺が一体のフレームとして設計され、親子扉の玄関、台所側の換気扇、共用廊下の手摺りの目隠しを確認した。よって、この時点では共用部分及び各住戸に共通する設備の設計の大半は完了していたと推察される。

4.3 配置図兼1階平面図

各階の平面図(S=1/100)における住戸の間取りは、A型、B型共に平面詳細図と同様であった。このうち配置図兼1階平面図(図9)では1階の玄関への戸別階段はみられず、各戸の「テラス」は共用廊下へと変更されていた。また、建物北側には「自動車駐車場(車庫)」と管理人室とみられる部屋の記載を確認した。

5. 「新築工事設計図」(1956年7月6日)の設計内容

続いて、「新築工事設計図」のうち、日付欄に「31年7月6日」と記載された各階平面図の設計内容を分析した。

5.1 配置図兼1階平面図

各階平面図(図10)の共用部分に大きな変更はみられなかったが、

各住戸の間取りはそれぞれが異なっていた。

5.2 A型(メゾネット式)住戸の間取りの変更箇所

次に、各階平面図におけるA型の間取りの変更の傾向を把握するため、箇所を居室・収納・水回り・バルコニーの4つに分類し、階数ごとに比較した(表2)。全体としてサブルームにおける変更は少なく、メインルームでは居室の連結と収納の変更が多くみられた。居室の連結は東側の2室を連結させることが多く、東西の2室を連結させたものは2戸のみであった。下メゾネット式の住戸では居室の連結は1戸のみであった。どの居室も和洋の選択が可能であり、洋室にした場合は縁側が消失していた。収納に関しては多くの部屋で形状の変更や新設が確認できた。水回りに関しては1戸のみ洗面台を浴室内に移動する軽微な移動が確認できた。バルコニーの形状の変更は確認できず、4戸で物置が設置されていた。

分類		住戸階(メイン-サブ)				計
		2-1	3-4	5-4	(戸数)	
		(8)	(8)	(8)	(24)	
居室	東6帖と東4.5帖の連結	4	1	3	8	
	東4.5帖と西4.5帖の連結	1	0	1	2	
	縁側の消失	4	3	4	11	
収納	収納(廊下)の変更	2	1	4	7	
	収納(東西)の変更	6	6	8	20	
	階段下収納の追加	4	7	2	13	
	その他収納の増設	3	3	3	9	
水回り	水回りの移動	0	1	0	1	
バルコニー	物置の設置	0	1	3	4	

0 5m [縮尺=1/200]

図6 A型平面詳細図(1956.2.16, S=1/20)

図7 B型平面詳細図(1956.2.16, S=1/20)

図8 B型西側立面図(1956.2.16, S=1/20)

図9 配置図兼1階平面図(1956.2.16, S=1/100)

図10 配置図兼1階平面図(1956.7.6, S=1/100)

さらに、「新築工事設計図」のうち、各住戸の設計変更点が記載された室内平面詳細図(S=1/50)及び設計変更時の見積書を用いて、室内設計変更の詳細を分析した。

取得した17戸の室内平面詳細図では、間取りや仕上げの変更、造付けの家具等の注文及びその立面詳細図の記載を確認した。また、「吊り床（保留）」、「現場見木決定ノコト」など図面作成時に決定が保留がされている箇所も確認した。加えて、A型の一部の階段には「コンクリート」又は「鉄骨」と記載され、階段構造の選択が可能であったと推察される。また、B型住戸のうち2戸の居室では「切りコタツ」の記載を確認した。

A型の上メゾネット式であるA1号室では、室内平面詳細図と室内設計変更の見積書（「概算見積書」と「精算見積書」）の記載事項を対応させることで、設計変更の詳細を把握した。

「概算見積書」の内訳（表3）は建築工事、電気工事、給湯衛生治、瓦斯工事の4つに分かれており、建築工事の内訳はさらに減額工事と増額工事に分けられていた。

「精算見積書」の内訳(表4)は建築工事、電気工事、給排水衛生工事、瓦斯工事に加え、瞬間湯沸器と風呂桶の6つに分かれており、こちらでも建築工事は減額工事で増額工事に分けられていた。「概算見積書」と比べ建築工事は大幅に増額となり、瓦斯工事は減額となっていた。

「精算見積書」の建築工事のうち減額工事の記載内容を A 型平面詳細図に加筆したものが図 11 である。

d) 「精算見積書」の建築工事（増額工事）の記載内容

「精算見積書」の建築工事のうち増額工事の記載内容を A1 号室の室内平面詳細図に加筆したものが図 12 である。

メインルームでは洋間に変更された居室（東4.5帖）で「床フローリング」、窓際の「カーテンレール」、出入口の「フラッシュ戸」が記載されていた。居室（西4.5帖）でも同様に「床フローリング」と「カーテンレール」が記載され、出入口は「引戸」とされていた。出入口横には「造付本棚」が設置され、室内平面詳細図にはその立面詳細図が描かれていた。畳敷きの居室（東6帖）では、天井は「和風 天井」、「杉 ベニヤ天井板 材上線縁、大工手間共」と記載され、南側の壁は「砂壁」、出入り口は「板フスマ」の「片引」と記載されていた。収納については、収納（廊下）は「洋服タンス造り付」、収納（東西）は「洋服タンス、タンス置場、カーテンレール共」と記載されていた。水回りについては、洗面所と便所で「床モザイクタイル」が記載されていた。

名称	摘要	数量	単位	金額
建築工事		1	式	63,315
電気工事	コンセント1ヶ増, 蛍光灯1ヶ増	1	〃	6,000
給湯衛生工事	洗面器レ-109	1	〃	23,000
瓦斯工事	3ツ口レンジ, イカリ…, 給湯系統配置 (洗面所, 台所, 浴室, …)	1	〃	52,000
合計				144,315

名称	摘要	数量	単位	金額
建築工事	下記内訳ノ通り	1	式	125,400
電気工事	コンセント増設 2ヶ, 天井灯増設 2ヶ	1	〃	10,403
給排水衛生工事	洗面器レ-91 トラレ-109 ニ変更. 台所流シ, 洗面器, シャワー	1	〃	30,403
瓦斯工事	上リ湯, 給湯, ガス栓増設 3ヶ	1	〃	7,000
瞬間湯沸器	IM-275 号	1	〃	53,400
風呂桶	箱型)桧製並 2 人上製上湯ナシ	1	〃	7,800
合計				234,406

図 11 A1 号室「精算見積書」の建築工事（減額工事）該当箇所

図 12 A1 号室「精算見積書」の建築工事（増額工事）該当箇所

図 13 A1 号室「精算見積書」の建築工事以外の該当箇所

イル、腰 36 タイル貼他」と記載されていた。バルコニーでは「バルコニー物置」が記載され、室内平面詳細図には「物入レ」、「手擦高さ 物入レ」と記載されていた。サブルームでは「カーテンレール」、「厨房敷物」、「厨房家具変更」が記載されていた。この厨房家具について、室内平面詳細図には「詳細参照 土方氏ト同ジ」と記載されていたことを確認した。

e)「精算見積書」の建築工事以外の記載内容

「精算見積書」のうち建築工事以外の記載内容を A1 号室の室内平面詳細図に加筆したものが図 13 である。電気工事における「コンセント増設」は居室（東 6 帖）と居室（西 4.5 帖）内であり、「天井灯増設」箇所はサブルームの台所付近とピアノ設置予定位置上部の「スポットライト」であったとみられる。給排水衛生工事には洗面器、台所の変更、シャワーが記載されていた。瓦斯工事にはシャワーの設置に伴う「上り湯」、台所の「給湯」、サブルームの居間及びメインルームの東側の 2 つの居室の「ガス栓」が記載されていた。そのほか、洗面所に設置される瞬間湯沸器の型式及び風呂桶として「箱型桧製並 2 人上製上湯ナシ」の記載を確認した。

7. 解体前実測調査による住戸設計の把握

解体前実測調査では、「新築工事設計図」（31 年 7 月 6 日）の各階平面図と比べ間取りの変更の少ない A 型の 2 室（A2、A3 号室）の現況平面図 / 断面図を作製した。また、保存状態の良い A2 号室、B1 号室では各住戸に共通する設備として東側窓まわり、台所、玄関の現況詳細図を作製した。これらより住戸設計の詳細を分析した。

7.1 A2 号室（図 14、写真 1）

A2 号室のメインルームの居室では和風の仕上げが施され、東側の 2 つの居室間には欄間を確認した。居室（東 4.5 帖）には床の間があったが、「新築工事設計図」に記載された平面形状とは異なっていた。収納（東西）は東西の 2 居室から出し入れが可能であった。造り付けとみられる洗面台の表面はタイル貼り、下地は人工石研出であっ

た。バルコニー出入口の内側は鉄製の引戸であり、外側の網戸は 3 枚構成で、左右は片開き戸、中央は嵌め殺し戸であった。階段はコンクリート製であった。サブルームの台所横及び階段下の収納は「新築工事設計図」には確認できず、増設されたものと推察される。

7.2 A3 号室（図 15、写真 2）

A3 号室では全体的に洋風の仕上げが施され、居室（東 6 帖）と居室（西 4.5 帖）は一体の洋間とされ、北側の壁面は「造付本棚」、「押入」、「洋服ダンス」で占められていた。居室（東 4.5 帖）から廊下、洗面台にかけて壁面頭上に収納があり、階段上部には天井より吊り下げられた「仏壇」を確認した。階段は鉄骨製であり、階段下の収納は入居後に増設されたものであると推察される。サブルームでは「楽譜入レ」とみられる棚を確認した。

7.3 東側窓まわり（図 16）

建物東側の壁面には、多くの住戸でサッシ下段外側に木製の格子を持つ、共通の 2 段構成のサッシが設置されていたことを確認した。

7.4 台所（図 17）

台所は L 字の平面形状を持ち、共用廊下側にステンレスの流しと生ゴミ入れがあり、共用廊下から生ゴミを取り出せるようになっていた。台所のガスコンロ位置上部の収納裏から共用廊下にかけて排気用のダクトが通っていた。

台所と玄関の間には共通の収納が設置され、上段は台所側の棚、中段は抜けを持つことで郵便受けを兼ね、下段は靴入れであった。

7.5 玄関（図 18）

各住戸は共通の玄関フレームを持ち、玄関扉は共に内開きの親子扉からなり、親扉には解除可能なオートロック機能が、子扉には表札と郵便入れが付いていた。台所側には上下 2 つの窓があり、上部には嵌め殺し窓と共に台所の排気の為の換気扇が^{注 13)}、下部には引違い窓が取り付けられていた。その下の収納からは台所のゴミを取り出せるようになっていた。玄関フレームの横の収納は、クリーニング業者が洋服を出し入れするための衣類入れであったと推察される。

図 14 A2 号室の現況平面図 / 断面図

図 15 A3 号室の現況平面図 / 断面図

写真 1 A2 号室内観

写真 2 A3 号室内観

図 16 B1 号室居室の現況東面展開図／東側窓断面図

図 17 A2 号室台所の現況東西断面図／北面展開図（一部、玄関横収納）

8. まとめ

四谷コーポラスの分譲販売開始時の設計は、4 階のみに共用廊下を持ち、1 階の住戸は戸別の階段を有する、各住戸の独立性の高いものであった。建設工事が着工した時点では、1 階の戸別階段と玄関前の「テラス」は無くなり、1 階にも共用廊下が設計されていた。共用部分と各住戸に共通する設備の設計はこの時点でほとんど完了していたと推察され、住戸の標準的な間取りと仕上げも決定されていた。

室内設計変更の見積りは建築工事、電気工事、給排水衛生工事、瓦斯工事から構成され、建築工事はさらに、基本設計図における仕上げ等を取り除く減額工事と追加する増額工事に分けられていた。さらに、解体前実測調査より住戸設計の詳細と共通する設備として東側窓まわり、台所、玄関の機能を把握した。

以上より、四谷コーポラスの設計の変遷として、分譲販売時から着工時にかけて共用部分の大幅な設計の変更があったことが明らかになり、設計のプロセスとして、着工時に共用部分と住戸の共通の設備及び基本的な間取りと仕上げを決定し、建設工事と並行して購入者と室内設計変更の検討を行っていたことが明らかになった。

謝辞

本研究の調査にあたり、四谷コーポラス居住者の方々、佐藤工業株式会社、旭化成不動産レジデンス株式会社には貴重な資料をご提供いただいた。この場を借りて深謝申し上げる。

本研究の一部は公益財団法人大林財団の助成を受けたものである。

参考文献

- 1) 玉田弘毅：コメンタール区分所有法，マンション管理センター，p. 59, 2005. 12
- 2) 阿部信夫，小西聖子，大月敏雄，安武敦子：1965 年までの民間集合住宅の所有関係に関する考察—東京 23 区内における建築系書籍掲載の事例を通して，2002 年度日本建築学会関東支部研究報告集，pp. 21～24, 2003. 2
- 3) 渡辺祥史，大月敏雄，安武敦子：東京 23 区内における初期民間マンションの供給動向に関する考察，日本建築学会学術講演梗概集（北海道），pp. 367～368, 2004. 8
- 4) 鷹尾拓寛：マンション黎明期における民間企業の果たした役割について，大阪市立大学都市系専攻修士論文概要集，p. 不明，2016. 2
- 5) 徳尾野徹，横山俊祐：マンション供給の萌芽と拡がり—新聞広告・記事からみる東京圏における展開（1），日本建築学会技術報告集 第 23 巻第 54 号，pp. 619～624, 2017. 6
- 6) 植竹悠歩，大月敏雄，志岐祐一，松本真澄：四谷コーポラスの住戸設計プロセスの研究，2017 年度（第 88 回）日本建築学会関東支部研究報告集 II，pp. 303～306, 2018. 3

図 18 B1 号室玄関の現況立面図

- 7) 植竹悠歩，大月敏雄，志岐祐一，松本真澄：四谷コーポラスにおけるメゾネット式住戸の変遷に関する研究—基本設計図・実施設計図・現況実測図の平面構成を通して，2018 年度日本建築学会大会〔東北〕，pp. 1371～1372, 2018. 9
- 8) 植竹悠歩，大月敏雄，志岐祐一，松本真澄：日本信用販売の「初期コーポラス」における建築計画的背景—設計者・木村恵一が経験した戦後の官庁営繕事業を軸として，日本建築学会第 13 回住宅系研究報告会論文集，pp. 23～28, 2018. 11
- 9) 建築界 NOTE，建築技術 No. 51, p. 81, 1955. 8

注

- 注 1) 本稿では四谷コーポラス居住者より収集した注 3) 及び注 6) を分析に用いた。尚、2017 年の建替えの決定に伴い、四谷コーポラス居住者及び管理組合所蔵資料は新宿歴史博物館に納入されている。日本開発は 1980 年代に倒産しているため、関連資料の他所での所蔵状況は定かでない。
- 注 2) 毎日、読売、朝日新聞のウェブ検索システムを用いた。
- 注 3) 1962 年頃の信販コーポラスの分譲マンション事業に関するパンフレット「This is THE CO-OPERATIVE HOUSE」。
- 注 4) 『毎日新聞』（東京）1956. 1. 29 朝刊、P. 8（都内中央版）。
- 注 5) 『毎日新聞』（東京）1956. 3. 4 朝刊、p. 13。
- 注 6) 1972 年 2 月発行の日本開発「社内報」内、松本駿一「コーポラスめぐり①」。
- 注 7) 『朝日新聞』（東京）1956. 10. 14 朝刊、P. 4。
- 注 8) 特許・実用新案に関して特許庁ホームページより該当すると考えられる特許分類（File Forming Term）の検索を行ったが、確認できなかった。
- 注 9) 「パンフレット」には B 型住戸の平面図及び鳥瞰図も同様に存在したと推察されるが、居住者より収集した資料からは確認できなかった。
- 注 10) 前掲注 4)。
- 注 11) 前掲注 5)。
- 注 12) 「日本信販四ツ谷コーポラス新築工事設計図」のうち日付欄に「1956 年 2 月 16 日」の記載のある給排水衛生設備工事（S=1/20）より確認した。
- 注 13) 解体前実測時には B1 号室の玄関の換気扇は既に撤去されていた。

〔2019 年 2 月 5 日原稿受理 2019 年 5 月 17 日採用決定〕